

「幼少年時の戦争体験」

梶田 忠勝さん

私の家族は8人で、兄弟は6人、男5人女1人私は*おトンボです。長男が昭和18年に出征し満州国へ。次男はダイハツ工業に勤務していて軍用車両を生産のために出征はなしでした。

父親は炭焼きと炭を販売し、片引き車で伊丹まで配達していました。また、秋には柿、クリを取り市場に出し生計を立てていました。

私の6才～8才の時の戦争体験は、昭和20年6月6日大阪大空襲が有り、池田市新町、中橋の近くに住まいしていましたが、その日の夕方には、東の空が赤く染まっていました。その日兄は、大阪商業高校に通っていましたが、電車も止まり、両親も大変心配していましたが、夜10時頃に歩いて帰ってきました。

昭和19年頃から、五月山周辺に、頻繁に焼夷弾が雨のように10～20落ちてきて、そのたびに空襲警報のサイレンがなり、家の前の歩道に防空壕があり、逃げ込むか電球を黒の布で囲いラジオを聴きながら厳しい日々を過ごしていました。ある日、兄と焼夷弾の落ちたところを見に行きました。不発弾があり、断面は六角形で油が周囲に飛んでいて焼け跡がありました。その後、東京空爆・広島原爆8月6日・長崎原爆投下後、終戦を迎えました。終戦後多くの焼け出された人々が親戚を頼って来られ、私の家にも2家族が来られました。家庭の食事については、サツマイモ・サツマイモのつる・ジャガイモ汁、お米なしの毎日で、粗食で食べ物がなく、時には南瓜の種や蜂の子をフライパンでいって食べた事、イナゴもサワガニも食べました。配給でいただいたお米は玄米のために一升びんの中に玄米を入れて竹の棒について白米を食べました。また、どこの家でもニワトリを5～6羽かっていて玉子を楽しみにしていました。盆と正月には鳥のすき焼きが大変楽しみにしていました。終戦後、学校へ行っても教材も無く、遊ぶ時間が多く5～6月には4～5時間目に山にどんぐりの実を取りにいきました。集めたどんぐりは業者が取りに来ていてパンと交換し、給食に出すと聞いていました。また、藁草履で学校へ行くため1日で破れて、母親にしかられました。学校の帰りは、川伝いで友達と魚を取りながら帰りました。洋服は兄のお古で過ごした毎日でした。近所の人とは助け合いが良く、おかずやごはんや珍しいものや、子守までどちらが本当の家かわからないくらい仲良くして頂きました。

父からの話では、兄が満州国に出征し終戦前昭和19年11月に戦地よりハガキが届き、病気で入院しているとの事で悪いようでした。終戦後12月の朝に、ただいま帰りましたと軍服姿で玄関口で家族全員が涙・涙・涙でした。

今言えることは、戦争は何も良いことはありません。人々を不孝にします。衣食住・教育・経済・人間関係にしてもその他……戦争は二度と起こさないようにしなければなりません。

*おトンボは、きょうだいの中で一番下の子を示す。